



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

聴覚障害児の英語語彙習得に関する一検討： 英語語彙短期記憶課題について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): Deafness, Learning English, Spelling acquisition 作成者: 小林, 汰門, 濱田, 豊彦, 吉田, 有里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00180008

聴覚障害児の英語語彙習得に関する一検討

—— 英語語彙短期記憶課題について ——

小林 汰門^{*1}・濱田 豊彦^{*2}・吉田 有里^{*1}

教育実践創成講座

(2022年9月26日受理)

1. はじめに

現代社会における私たちの生活には、英語があふれている。急速なグローバル化に伴い、外国語によるコミュニケーション能力の需要が高まっているとともに、社会情勢の変化に伴い、現代社会において求められる力は変化し続けている。学習指導要領（2017）においては、学校教育には、子供たちがさまざまな変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、さまざまな情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められているとされており、自ら課題を見つけ、自らがそれに向かって解決しようとする力が必要となってきた。具体的に、英語教育においては知識のみならず、グローバル化の進展に関係して、本人の居場所や状況を問わず、「英語を使う力」が求められていると解釈できる。それに伴い、2018年度の学習指導要領改訂では、小学校外国語の教科化が明記され、2020年度からそれが全面実施された。この施行は、学校教育法により、幼稚園や小学校、中学校、高等学校に準ずる教育を施すよう命じられている特別支援学校においても同様のため、聴覚特別支援学校でも施行された。「英語を使う力」を伸ばすための技能として、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4つを掲げている。小学校の外国語科は、「聞くこと」、「話すこと」などといった音声活用を中心としながら、「読むこと」、「書くこと」を習得することを目標としてい

る。そのため、聴覚障害という障害の特性上、聴覚特別支援学校に在籍する児童においては、その習得に困難があると予想される。寺田、岩田（2017）によると、聴覚障害生徒が英語を学ぶ際、聴覚から英語の音声情報を取り込むことが難しいため、英語の音声情報の聴取理解と認知に問題が生じる。すると、語彙・文法の理解が不十分となり、英語の表出能力も伸び悩むこととなると示しており、音声言語である英語の習得は容易ではないことが窺える。また、三篠（2000）によると、聴覚障害者の英語の言葉の記憶方法は、聴者と同様に主に発音に基づいて覚えるが、これが不可能な場合には、視覚、手の運動感覚、指文字、口話などあらゆる手段を使い覚えるようであると示しており、発音を覚えることが英語学習において有効であることは考えられるが、聴覚特別支援学校に在籍するすべての生徒が発音を覚えながらの学習が可能であるとは限らない。このように、聴覚障害児はその障害の特性上、音声言語である英語の習得が難しいとされているが、生徒各々の習得方法で学習を進めていることが分かる。学習指導要領改訂では、「聞くこと」、「話すこと」を小学部の外国語活動の中心としていることを示したが、そのほかに習得語彙数の増加が顕著である。学習指導要領（2017）において、小学校段階では600-700語が新たに加わり、中学校段階では現行の1200語から1600-1800語、高等学校段階では現行の1800語から1800-2500語に増加したことが示されている。つまり、「英語を使う力」を育むためには英語の語彙習得が必須であり、聴覚障害児の英語教育においてもそれは共通事項であると考えられる。このような

*1 東京学芸大学 教職大学院

*2 東京学芸大学 教育実践創成講座（184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1）

改定は、小学校、中学校、高等学校の連続性を軸としている。しかし、前述したように、聴覚障害という障害の特性から、コミュニケーション活動を中心とした授業は困難である。さらに、早川（2005）は聴覚障害児の英語への興味関心にも言及しており、その結果、大半の聴覚障害を持つ中学・高校の生徒達は、英語学習の初期の段階から極端な苦手意識を持ち始め、高等部に入学してくる段階では異口同音に「英語は嫌い（または苦手）」と口にするのであると示している。聴覚障害児にとっての英語という位置づけがなかなか定まっていないのが現状だ。今回の学習指導要領改訂について、文部科学省等から聴覚特別支援学校の英語科における指導の方針や手立ての工夫についての具体的な文言はなく、さらには1つの学級の中に聴力、コミュニケーション手段、言語力などにおいて多様な児童が在籍するため、授業の組み立ては難しい。そこでまずは、音声入力が難しいとされる比較的重度の聴覚障害児が音声言語である英語を記憶する際の特徴や傾向を示すための実験を行った。

2. 目的

英単語短期記憶課題を聴覚特別支援学校在籍の聴覚障害児に実施し、音韻活用や視覚活用の認知的側面と語彙習得を困難にさせる要因について結果をもとに考察することを目的とした。

3. 方法

3. 1 対象者

聴覚特別支援学校小学部における外国の授業は担当教員の免許（英語）取得の有無などまだ体制が一律とは言えない。そこで、本研究では、聴覚特別支援学校中学部に在籍する生徒19名と高等部に在籍する25名に英単語課題を実施した。

3. 2 調査方法 1

3. 2. 1 手続き

課題は図1のような英単語をモニターに提示し、それを書写させることで、記憶の際にどのような特徴や傾向が現れるのかを検討する。

3. 2. 2 提示時間

小澤ら（1997）によれば、成人の音読速度は1秒に5.58音節であった。本研究では中学生にアルファベットを提示することから1秒当たり5文字を適当と考



図1 問題例

え、モニターの提示時間は、1文字0.2秒とした。たとえば、図1のlikeだと、4文字で構成されているため、提示時間は0.8（0.2秒×4）秒となる。

3. 2. 3 提示問題

今回の課題の問題構成は有意味単語10問、非単語5問の計15問とした。非単語を加えた理由としては、有意味単語のみで課題を実施してしまうと、既知の単語を頭の中で再生してしまい、記憶課題の側面が不明瞭になると判断したからである。非単語を取り入れ、単純に視覚的に得た情報から単語を記憶しているかどうかを調べるためである。

有意味単語については、今回の対象が中学部・高等部に在籍する生徒であったため、中学部1年の教科書に掲載されているものを選出した。非単語は、CNREP（children test of nonword repetition）（以下、CNREPとする）から5つ選定し、それぞれ単語の長さが異なるように、音節数が2, 2, 2, 3, 4と段々と増えていくように出題した。CNREPとは、幼児・児童用非単語反復課題のことであり、英語の音韻体系に基づいて構成されている。関口・湯澤（2005）らは非単語反復課題を初めて聞いた言葉（非単語）を口に出して言う能力を測定する課題であると示している。非単語を出題する際に、英単語の構造上、存在しないアルファベットの羅列を出題することはできない（yyy, eeeなどは英単語を構成しない）ため、口に出して言う能力を測ることができる、つまりは英語の音韻体系に基づいて構成された非単語を用いているCNREPの中から非単語を選定することとした。今回の課題における

②, ⑤, ⑧, ⑪, ⑬が非単語となる。

表1 課題に用いた単語

問題	
①	like
②	diller
③	judge
④	fish
⑤	rubid
⑥	photo
⑦	doctor
⑧	glistow
⑨	tuesday
⑩	beautiful
⑪	dopelate
⑫	usually
⑬	commeciate
⑭	thursday
⑮	xylophone

表2 非単語の読み方の正答

問題	正答
② diller	ディラー
⑤ rubid	ルビッド/ラビッド/ルビド
⑧ glistow	グリストウ/グリストゥ
⑪ dopelat	ドープレイト/ダープレイト/ドベレイトほか
⑬ commeciate	コミッシエイト/コームシエイト

を選定することとした。今回はあらかじめ仮説を立てることによって、仮説を基に傾向や特徴を検討できるようにした(表3)。

また、採点方法について、スペルの書き取り、読み方の記入ともに、1文字もミスなく表記できたものを正答とし、その他ミスがあったものについてはミスごとにカテゴリー分けした(表4)。

表4 課題の書き取りミスごとのカテゴリー

種類	概要
置換	本課題における置換とは、スペルを書き取る際に、本来のアルファベットではなく、別なものに置き換わってしまうことを指す。 例) apple → aqple
挿入	本課題における挿入とは、スペルを書き取る際に、本来の英単語のスペルに別なアルファベットが加わってしまうことを指す。 例) apple → applue
脱落	本課題における脱落とは、スペルを書き取る際に、本来の英単語のスペルのいずれかが書き取りされないことを指す。 例) apple → appl

3. 2. 4 分析方法

本課題では、モニターに英単語を定められた時間で提示したのち、英単語のスペルを記入させる。その次に、その英単語の読み方をカタカナで記入させる。これは、聴覚障害児が英単語を記憶する際に、音を手掛かりにしているかどうかを検討するためである。読み方の正答について、非単語については実際に存在する単語ではないため、明確な答えは存在しない。したがって、正答を定めるために、一定数の大学生に同じ英単語課題を実施し、その解答の中で多かったものを読み方の正答と定めることとした(表2)。有意味単語の選定に関しては、その時々目的に合わせたもの

表3 提示問題ごとの仮説

問題	仮説
① like	ローマ字読みでなく、フォニックスルールにおけるサイレントeが適用されている英単語を出題。聴覚障害児が「リケ」などと間違っ読んで覚えてしまう傾向があるのではないかと予想した
③ judge ④ fish	jとg, fとhのような、同じような高さのアルファベットが混合している英単語を出題。アルファベットの見た目からミスを起こしやすいのではないかと予想した。
⑥ photo	聴者ではフォという音に対してfとphで間違えることが多く見られる。しかし、聴覚障害を有することで、文字と音の連結が不十分である場合に、フォという音=fの混同は聴者に比べて起こりにくいのではないかと予想した。
⑦ doctor	doctorは一般的に「ドクター」のようにカタカナ表記で見ることが多い。カタカナは書けるが、スペルは書けないというようなエラーが起きるのではないかと考え、出題した。つまり、頭の中でドクターというカタカナは思い浮かぶがそれが英語のスペルに変換されず、アルファベット表記には難しさを感じるのではないかと予想した。
⑩ beautiful	beautifulは、文字数が多い英単語の時に聴覚障害児は英単語をどのように捉えるのかを検討するために出題した。浅井・小西・石川・松岡ら(2017)らの研究では、英語学習者は、どのような英単語に難しさを感じるのかを尋ね、数値化することで語彙特性を整理した。意味幅や意味深さ、出現度など、様々な特性があるなかで、学習者が特に難しいと感じられる語は、音節数で見て構造的に長いというものがあった。その音節数の平均は3.5であり、その次に難しい語であるとされた音節数の平均は2.6であった。この結果から、今回の英単語テストにおいては、音節数が3以上であるものを長い英単語であると定義したため、⑩ beautifulは長い英単語としている。
⑫ usually	副詞は実体物のあるものではないため、頭の中で想像がしにくい。副詞の習得が発達段階から見て遅れが生じやすいとされている聴覚障害児では、ミスが起こりやすくなるのではないかと予想した。
⑨ tuesday ⑭ thursday	tuesday, thursdayはどちらもtから始まりdayで終わる英単語であるため、視覚的にスペルがとても似ているといえる。さらに、どちらも曜日を表す英単語であることから、学習する際には同時に出てくることが多いと考えられる。このような2つの英単語を同時に提出すると、視覚的な間違いが起きやすいのではないかと予想した。
⑮ xylophone	明らかに読み方が難しい英単語の場合、どのように英単語を捉えるのかを検討するために出題した。

3. 3 調査方法2

3. 3. 1 手続き

本課題を行った生徒の英語の授業を担当する教職員にアンケートを実施した。アンケート項目は主にコミュニケーション手段、裸耳聴力、日本語力、英語力の4つである。日本語力については、読書力検査の結果を記入させた。英語力については、実用英語技能検定の結果と教職員の所感を回答させた。調査方法1の課題の結果と2のアンケートの結果を用いて、聴覚障害児の英単語習得の傾向や特徴を分析した。

本研究では、まず対象とした聴覚特別支援学校の学校長に口頭と書面で実験の詳細を説明し研究協力の承諾を得た。保護者にも書面で承諾を得て、対象とした生徒たちに対面で確認の上、同意を得た者のみを対象とした。

4. 結果

4. 1 課題全体の成績

スペルテスト全体の平均正答率は46.3%、読み方テスト全体の平均正答率は28.4%となった。読み方テストの平均生徒率がスペルテストの平均正答率よりも17.9ポイント低い結果となったことから、聴覚障害児は文字と音の連結に難しさがあるのではないかと推察した。

図3は、英単語を文字数順に並べ替えたときのスペルテスト、読み方テストの平均正答率を表した時のグラフである。このグラフから、文字数が多くなればなるほど平均正答率が低くなっていることが見てわかる。仮説(表3内)の中で記したとおり浅井ら(2017)らは、音節数の多さが習得に影響することを示唆している。本研究においても、音節数が長い英単語ないしは文字数が多い英単語を捉えることは聴覚障害児にとっても難しいという結果が得られた。

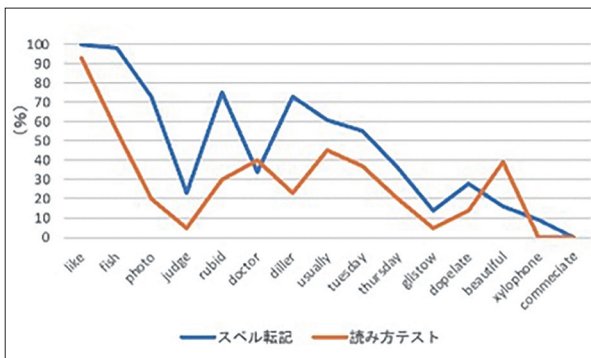


図2 課題全体の平均正答率

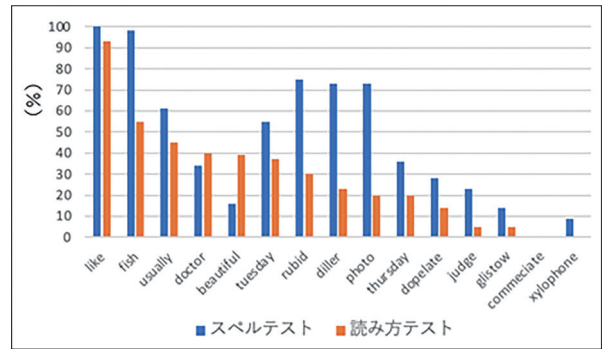


図3 文字数順の平均正答率

4. 2 誤りパターンについて

今回は、誤りのパターンとして「置換」、「挿入」、「脱落」の主に3つを設定した。スペルテストにおいて、3つの中で一番多く存在した誤りとしては「置換」であった。置換が起こりやすいアルファベットは「d」が多く、鏡文字の「b」と書いてしまう回答がみられた。他にも、「t」や「l」と書いてしまう回答もあり、これはアルファベットの高さが似ていたことから間違いが起きてしまったのではないかと考えられる。他には、問題⑦のdoctorにおいて、「o」や「c」の置換がみられた。この問題の場合、o, c, oと形が比較的似ているアルファベットが続いているため、混同しやすくなったのではないかと予想できる。読み方テストにおいては、さまざまな誤りがあったなかでローマ字読みをしてしまっている回答があった。さらに、問題⑥のphotoでは、「ph」の部分で「フォ」と変換することができず、それぞれのアルファベットの音素に依存した回答が多く存在した(プホトなど)。

5. 考察

5. 1 視覚的な混同による誤り

仮説において、問題③judgeや問題④fishなどで「j」と「g」、「f」と「h」のような高さが似ているアルファベットの間で誤りが起こりやすいのではないかと考えたが、結果は概ね仮説に合致していたと考えることができる。文字と音の連結がなされている場合は、「j」と「g」というアルファベットを頭の中で再生されると、別なアルファベットであると認識することができるが、聴覚障害を有することで、文字と音の連結が不十分な場合は、アルファベットを形で捉えるようになるため、高さが同じアルファベットや形が似ているアルファベットと混同してしまうのではないかと推察した。特に、問題③judgeは、「j」と「g」という高さが似ているアルファベットだけでなく、「j」と「g」の間に、鏡文字の「b」と混同しやすい「d」が入っている

ることにより、正答率はかなり低くなった。これらは結果でも示した問題⑦の *doctor* でもみられた誤り方であり、*judge* のスペルテストの正答率が22%、*doctor* の正答率が34%と低い水準である。このことから、文字と音との連結が不十分である場合には、聴覚障害児は視覚が優位であることによる間違いが起こりやすいと考えることができ、このような間違いを起こさないためには、教育現場においてどのような指導が有効であるのかを検討する必要がある。上岡・鈴木 (2019) らの研究では、「b」と「d」や「p」と「q」などのアルファベットが鏡文字になる、「f」と「t」など形態の似たアルファベットの判別ができない、英単語の読み・意味・綴りが覚えられないなど、アルファベットレベルでの困難さを示す子どもを対象にフォニックス指導を行った。上岡らがいうフォニックス指導とは、アルファベットの音素 (phoneme) と書記素 (grapheme) の対応関係を習得することを目的とした指導法であり、現在では日本の小学校における外国語活動でも取り入れられるなど、広く活用されている基礎的なアルファベットの読みや書きを教える指導法である。それぞれステージを分けて指導し、アルファベットごとの音素の確認から、二重母音や読まないアルファベットのルールの学習まで、段階に応じた指導となっており、指導後のテストでは、指導前よりも正答率がよくなっていることが示されている。特に、ローマ字読みをしてしまっている英単語に対して、ルールに基づいた読み方をできるようにする指導であるため、この指導法は聴覚障害を有する児童生徒にも有効的であると考えられる。

5. 2 文字と音の連結による誤りの傾向

聴者によくみられる誤りの中に、「ph」のスペルを「f」としてしまふことがある。しかし仮説の中では、文字と音の連結の不十分さから、「ph」と「f」の違いは起こりにくいのではないかと考え、*photo* を出題した。結果的に、スペルテストにおいては、「fo」から書き始めた回答は1つもなく、読み方テストの結果を見ても、「フォ」と正しく書くことのできた回答は20%のみであった。この結果からは、そもそもダイグラフ (二つの文字で一つの音になる文字列) のような英語のフォニックスルールにはなじみがあまりなく、聴者のように、聞いているうちに覚えていくという経験もなかなか難しいため、ルールとしての指導を明確にしていくことが必要である。

5. 3 英語学習における日本語力の重要性

今回は、英単語課題の他に、生徒のプロフィールデータを集計し、そのデータも用いて分析をした。英語力、日本語力をそれぞれ数値化し、分析を進めると、英語力と日本語力の相関係数は0.63であり、英語力の向上を図るためには、ある程度の日本語力の必要性があると考えられた。これは、第2言語の学習とはいえど、説明をする際には日本語ないしは手話を用いて指導をする。そのため、そもそもの日本語の力がある程度なければ、学習の理解が進みにくいのではないかと考えられる。濱田ら (2008) が行った研究では、聴覚障害生徒の日本語力と英語力には高い相関があると示されており、日本語力を高める指導が英語力の向上に直結すると考える。

6. 結語

本研究の目的は、聴覚障害児の英単語語彙習得の際の傾向や特徴を明らかにすることであった。まず、スペルテストの誤りパターンとして、書き取りの際に、形の似たアルファベットに置換が起きてしまうパターンが挙げられた。これは、聴覚障害を有することで、文字と音の連結が不十分であり、アルファベットを形で捉えるようになることで、高さが同じアルファベットや形が似ているアルファベットと混同してしまいやすくなっていると考えられた。また、読み方テストにおいて、アルファベットの音素から外れた読み方をする英単語は読み方に困難さを示した。これは、聴者のように、聞いているうちに自然に覚えていくという経験がなかなかないため、一般的には簡単であるとされる英単語の読み方にも困難さを示していると考えられた。また、収集した生徒のプロフィールデータから、日本語力と英語力の相関が読み取れた。これは、英語という言語を指導する際にも、日本語や手話を用いるため、母語の理解力が英語力の習得に影響を及ぼすと考えられる。

急速なグローバル化により、日々「英語」の需要は高まっている。聴覚障害児の学習環境や生活環境、コミュニケーション手段などは様々である上に、そのような様々な特徴を持った生徒が1つの学級で学んでいる。これら1つ1つの要因を細かく検討しながら、聴覚障害児の英語学習の手立てを検討していくことが今後の課題である。

また、聴児に対しても同様の調査をすることで英単語習得における聴覚障害の影響をより明確に示すことができる。この点も今後の課題としたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました、対象生徒の皆様、保護者の方々、聴覚特別支援学校の先生方に深く感謝申し上げます。

本研究の一部は、第48回日本コミュニケーション障害学会学術講演会にて発表されたものである。

文献

- 浅井淳・小西章典・石川有香・松岡真由子 (2017) 英単語に対する難度感について (2). 日本教育心理学会第59回総会発表論文集, 309.
- 石坂郁代・木船憲幸・大平壇 (2004) 健常児における読みと音韻意識および作業記憶の関係. 福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編 (53), 307-316.
- 今尾貴美子・都築繁幸 (2006) 聴覚障害児の作動記憶に関する一考察. 障害者教育・福祉学研究 (2), 1-12
- 小澤由嗣・武内和弘・城本修・長谷川純・綿森淑子 (1997) 健常者の音読速度と速度調節の 方略—予備的検討— 広島県立保健福祉短大紀要, 3 (1), 95-102.
- 上岡清乃・鈴木恵太 (2019) 英語学習に困難を示す生徒に対する効果的な指導法—フォニックスを基盤とした英単語読み指導の効果— 全国英語教育学会紀要, 30, 257-269.
- 河合裕美 (2020) 通常学級に在籍する聴覚障害児童の英語音素知覚・産出能力：教科化におけるインクルーシブ英語教育体制の取組みへ 英文学思潮, (93), 1-29.
- 近藤美和・澤井亜美・村山拓 (2021) 英単語学習における読み書き・スペリングの習得の困難に関する検討 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 72, 209-216.
- 関口道彦・湯澤正通 (2005) 幼児期の英語学習経験は有効か—非単語反復課題を用いた検討— 広島大学心理学研究, 5号, 119-129.
- 田邊達雄 (2005) 聴覚障害生への英語教員に求められるコミュニケーションの手段について：聾学校中学部及び中学校難聴学級の英語教員へのアンケート調査を中心に 日本教科教育学会誌, 28 (2), 31-40.
- 谷本忠明・井上由香 (2018) —難聴生徒に対する英単語読みの指導 (1) —指導のための規則と単語の選定— 特別支援教育実践センター研究紀要 第16号, 73-81, 2018.
- 谷本忠明・井上由香 (2018) —難聴生徒に対する英単語読みの指導 (2) —指導過程の概要—, 特別支援教育実践センター研究紀要 第16号, 83-92, 2018.
- 長南浩人 (2003) 聴覚障害児の読解力を向上させるためのコミュニケーションの在り方—認知心理学の視点から, ろう教育科学, 45 (3), 167-176.
- 寺田理沙・岩田吉生 (2017) 聴覚障害学生の英語教育の課題に関する文献的検討 障害児教育・福祉学研究, (13), 147-151.
- 浜崎通世・岩田吉生・田口達也・小塚良孝 (2016) 聴覚障害学生に対する教室での具体的英語指導—愛知教育大学における取組と課題— 教養と教育, (16), 1-12.
- 濱田豊彦・高木恵・大鹿綾 (2008) 聴覚障害児の読書力と英語の学習効果に関する一研究 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 59巻, 379-385
- 早川就 (2005) 聴覚障害児の学力—聴覚障害生徒の英語の学力と指導内容について (特集：ろう教育学会第46回大会)— (シンポジウム 聴覚障害児の学力) ろう教育科学, 46 (4), 184-190
- Baddeley, A.・Gathercole, S.・Papagno, C (1998) The phonological loop as a language learning device. Psychological review, 105(1), 158.
- Marscharks, M・Knoors, H (2012) Educating deaf children: Language, cognition, and learning Deafness and Education International, 14, 137-161.
- 三簾和宏 (2000) 聴覚障害者の英語学習について—調査をとおして学習の特徴と指導を考える— ろう教育科学 第42巻 第3号 51-57.
- 三簾和宏 (2003) 英語力と聴力の関連, 英語力と日本語力の関連 ろう教育科学 第45巻 第2号 101-107.
- 三簾和宏 (2006) 聴覚障害者の英語の人称代名詞. の対応について ろう教育科学 第48巻 第2号 59-79.
- 文部科学省編 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編 平成29年7月』
- 四日市章・鄭仁豪・澤隆史・ハリー・クノールス・マーク・マーシャーク (2018) 『聴覚障害児の学習と指導 発達と心理学的基礎』 明石書店

聴覚障害児の英語語彙習得に関する一検討

—— 英語語彙短期記憶課題について ——

A Study of English Vocabulary Acquisition in Hearing Impaired Children:

About the English Vocabulary Short-term Memory Task

小林 汰門^{*1}・濱田 豊彦^{*2}・吉田 有里^{*1}

KOBAYASHI Tamon, HAMADA Toyohiko and YOSHIDA Yuri

教育実践創成講座

Abstract

The purpose of this study is to conduct an English vocabulary short-term memory task at a special needs school for the hearing impaired, and to identify trends and characteristics in the acquisition of English vocabulary by children with hearing impairment. In today's rapidly globalizing society, the demand for communication skills in foreign languages is increasing, and with the revision of the Courses of Study in 2017, elementary school English has become a subject of study. Since the acquisition of the English language is expected to be difficult for students enrolled in special needs schools for the hearing impaired, it is necessary to organize the trends and characteristics in English vocabulary acquisition.

The error pattern in the spelling test was a pattern in which substitutions occurred between letters of the alphabet that were similar in shape when written. This is thought to be due to the fact that having a hearing impairment results in inadequate letter-sound connections and a tendency to perceive the alphabet in terms of its shape. In reading tests, English words that deviated from the phonemes of the alphabet showed more difficulty in reading. It was thought that the difficulty in reading may be directly related to the fact that students do not easily have the experience of learning words naturally as they hear them, as is the case with listeners. The student profile data also showed a correlation between Japanese and English language proficiency, suggesting the need for Japanese language proficiency in the native language to be used for English instruction.

Keywords: Deafness, Learning English, Spelling acquisition

Advanced Studies on Transforming Educational Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要 旨

本研究では、聴覚特別支援学校において英単語短期記憶課題の実施し、聴覚障害児の英単語語彙習得の際の傾向や特徴を明らかにすることを目的とする。グローバル化が急速に進む現代社会において、外国語によるコ

*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

コミュニケーション能力の需要は高まっている。2017年度には学習指導要領改訂により、小学校英語の教科化も始まっている。聴覚特別支援学校に在籍する児童生徒にとって、英語という言葉の習得は難しいと予想されるため、英単語語彙習得の際の傾向や特徴を整理する必要がある。

スペルテストの誤りパターンとして、書き取りの際に、形の似たアルファベットに置換が起きてしまうパターンが挙げられた。これは、聴覚障害を有することで、文字と音の連結が不十分であり、アルファベットを形で捉えるようになることが要因となっていると考えられる。また、読み方テストにおいて、アルファベットの音素から外れた読み方をする英単語は読み方に困難さを示した。聴者のように、聞いているうちに自然に覚えていくという経験がなかなかないことは読み方の困難さに直結するのではないかと考えられた。生徒のプロフィールデータからは、日本語力と英語力の相関も見られ、英語の指導に使われるのは母語の日本語力の必要性も示唆された。

キーワード: 聴覚障害, 英語学習, スペル習得